ANNUAL REPORT　Tsushima Senior High School Alumni Association Bulletin

三稜会懸賞論文
稲葉真弓賞特集

三稜会会報別冊

平成30年7月6日 第67号別冊
発　行　三稜会
（津島高校同窓会）
事務局（津島高校内）
〒496-0853
津島市宮川町3-80
電　話　0567-28-4158
発行人　北角　浩一

平成30年5月26日（土）表彰式

第８回　稲葉真弓賞　審査結果発表

テーマ　『選　択』　　応募総数　５４３点（12校より）

入賞作　７点　…入賞された皆さん、おめでとうございます。…

〈最優秀賞〉	１点	津島東高等学校	１年	下ノ薗真琴さん	（写真　中央）
〈優秀賞〉	１点	津島高等学校	１年	山下　歩さん	（写真　右から２人目）
〈佳　作〉	５点	五条高等学校	１年	三輪　俊太さん	（当日　欠席）
		清林館高等学校	２年	加藤　三奈さん	（写真　右端）
（表記学年は応募当時のもの）		津島東高等学校	２年	浅井　陸さん	（当日　欠席）
		杏和高等学校	１年	熊沢　咲良さん	（写真　左端）
		美和高等学校	２年	神尾明日香さん	（写真　左から２人目）

表彰式　平成30年５月26日（土）午後２時30分～　津島高校興学館

ご応募いただいた皆さん、ありがとうございました。

受賞者本人による作品の朗読が、下記にように放送されます。

１　**クローバーＴＶ放送**　８月１日～８月10日の「とくばん」の放送内。
　(1)　121 ch　19:00～　　(2)　111 ch　10:00～／23:00～

２　ＦＭ放送（**エフエムななみ77.3ＭＨｚ**）
　(1)　８月内　各土曜日　16:00～　　(2)　８月内　各日曜日　15:00～

【協賛団体】㈱　ヨ　シ　ヅ　ヤ　　クローバーＴＶ・エフエムななみ７７.３ＭＨｚ
虎ノ門法律経済事務所　　㈱三和スクリーン銘板　　㈱原ネームプレート製作所
㈱日本一ソフトウェア　　協和交易㈱
【後　　援】㈱　中　日　新　聞　社

第8回 稲葉真弓賞 受賞作品

最優秀賞

語彙力という選択肢

津島東高等学校
一年　下ノ薗真琴

私たちは人生において常に選択に迫られている。それは意識的なものや、無意識的なものなど様々である。また、私たちの未来に直接関わるもの、そうでないものなど、選択による生活環境への影響力の大きさも様々である。

私は、このような選択という広範囲なジャンルの中から、最も身近ともいえる言葉の選択に注目した。言葉には「言霊」が宿っていると言われる程、言葉は発言者の思いを強く込めることのできるコミュニケーション手段である。言葉の選択は、日常的な行為であるため、小さな選択に感じるかも知れない。しかし、言葉は、選択の仕方によっては、人間関係や、自分自身が周りに与える印象に変化をもたらすという大きな影響力を持っている。したがって、より良い言葉の選択をするためには、選択の幅を広げることが重要である。その幅を広げ、選択肢を増やすためにも今私たちがしなければならないことは、語彙力を身につけることである。

最近、「やばい」という言葉を耳にする機会が増えてきた。特に私たち高校生の間ではこの言葉を耳にするのは日常茶飯事である。しかし、「やばい」という言葉を使うことで、友達との会話ですれ違いが生じたり、話が噛み合わなかったりするといった経験をしたことはないだろうか。このような現象は、「やばい」という言葉を使う機会が増えてきたことに比例して増えてきている。なぜなら、「やばい」という言葉には、プラスの意味もマイナスの意味も含まれているからである。「やばい」という言葉は、本来不都合な様を意味する「やば」が形容詞になったもので、主にマイナスの意味で使われていた。しかし、今日ではプラスの意味で使われることも増えてきた。そのため、プラスマイナスどちらの意味としても捉えることのできる、「やばい」という言葉の本質を理解しないまま会話が進み、誤解やすれ違いが生じるのである。

また、「やばい」は万能性を持ち、非常に便利な言葉でもあるため、私たちは返答に困ると「やばい」という言葉に逃げてしまう。私も実際にそういう経験をしたことがある。友達と会話をしている中で、「あの歌手やばくない？」と聞かれた時に、「良い」というニュアンスなのか、「悪い」というニュアンスなのかを理解できず、「やばいよね。」と返し、逃げてしまった。あのときの私の「やばい」には、私の意思は何も込められていない。その時のニュアンスを理解していなくても、適当に相手に共感することができる「やばい」を魔法の言葉だと思い、濫用する人も多い。しかし、話し相手の何らかの思いが込められた言葉に、本質が見えていないまま返答することは、大変失礼で悲しいことではないか。

また、日本語には「やばい」という言葉のように、同じ言葉でもニュアンスが大きく異なるものが無数にある。「適当」という言葉もそれに当たる。例えば、「この本を適当な場所に片付けておいて」と言われたら、あなたは「適切な場所に戻して」という意味と、「どこでもいいから戻して」という意味と、二通りの捉え方のどちらに理解するだろうか。この場合、自分の選択した言葉の意味が、未来の行動に影響してくる。だから、「やばい」という言葉のように、捉え方を曖昧にして逃げることができない。

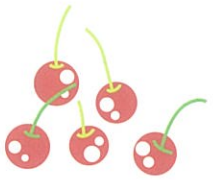
これは、自分が言葉の受け取り側であることが前提の場合である。しかし、もし自分がその言葉の発信者であるとして、相手が間違った意味として捉えたとしたならば、「適当」という言葉の本当の意味を理解できなかった相手に対して、腹を立てるのだろうか。私は発信者の言葉の選択に問題があると考える。「適当」という言葉には、「丁度良い具合に」という意味の他に、「いい加減に」などの意味も持ち合わせている。「この料理は適当な味だ。」という言葉の使い方から、「この料理は丁度良い味だ。」のように、言葉を少し変えるだけで、受け取る側は理解がしやすくなる。その結果、誤解やすれ違いが生じることを減少させることができる。

このように、今の私たちは便利な言葉に頼りすぎていることが分かる。これらの言葉は、使用するシチュエーションを正しく選択すれば、極めて使い勝手の良いものになる。その反面、すれ違いなどを引き起こしやすくさせるというデメリットもある。また、先にも述べたとおり、言葉の選択によっては、自分の印象が良くも悪くも周りに映ってしまうことがある。そのため、ただそれらの言葉に頼るだけでなく、「使用する時、場所、相手を選択すること」と「受け取り側に優しい言葉を選択すること」という二つの選択をすることが重要である。それらの選択を間違えないように、私たちはより多く

の言葉を学び、語彙力を身につける必要がある。

「語彙力を身につけることが何の役に立つのか」と考える人も多いと思う。しかし、その考えは、私たちがまだまだ未熟で、それでも許される世界にいることからくるものではないだろうか。やがて私たちは大人になり、学校という社会の縮図ではなく、本当の広い社会に出る。その時に語彙力が無いと、人の話が理解できない場面が増えるだけでなく、年齢に相応しい言葉を使うことができなくて困るだろう。その時になって後悔しないために、私たちは今こそ学ぶのである。語彙力を身につけること、つまり、より良い言葉を選ぶための選択肢を増やすことは、決して無駄にはならない。

高校生という様々なことを学ぶに適した時間を、何も考えずにただ卒業を待っているのと、少し先の未来を見据えて、日々の中から自分が成長できるヒントを探すのとでは、大いに将来が異なる。今学ぶことは必ず未来の自分に繋がる。私はこの機会に、自分自身が日頃話している言葉の選択について見直してみたい。そう思うことも、自分自身を成長させる大きな選択だ。



優秀賞

選択と共に生きる

津島高等学校
一年　山下　歩

どこへ行き、何をして過ごすか。何を学び、何を大切にし、どんな姿であろうとするか…。人間は生まれてから死ぬまで、実に多くの選択を行いながら生活を送っている。この無数の選択の中には、明るく楽しいものも、厳しく辛いものもある。夢や希望を与えてくれるものも、厄介に思えて仕方がないものもある。そして、程度の差こそあるものの、「選ぶ」ということには手間と時間が掛かる。つまり、選択は面倒なことなのである。初めから全てのことが決められており、選択を行う機会が無い方が、随分と楽であると考えることもできる。しかし、それでは何故、私たちは選択を繰り返す必要があるのだろうか。それは、選択するということが、そのまま自分自身や周囲の環境を形作ることに繋がり、人生をより豊かで深みのあるものにしているからである。

日常の中には、些細な選択が溢れている。食べるものや着る衣服を選ぶ際、何かを購入する際における選択は、私たちに「選ぶ楽しみ」を感じさせる。また、このような選択では、異なる選択肢のどちらにも魅力を感じ、一つに決めることが難しい場合でも、「どちらにしようかな、神様の言うとおり……」と運に任せて決めることや、自分ではなく、他者に選択を委ねて決めることができる。このような選択の方法は、どのような選択をしても結果としてはさほどの違いは起こらないということを理解しているからこそ可能なものである。日常的な選択は、このように自由で気楽な選択なのである。

もし、毎日同じ食事を摂り、同じ服装で過ごすというように、日常的な選択が制限されていたらどうだろうか。選択のために使っていた時間を削減できる代わりに、退屈に襲われることになるだろう。私たちは、何でもないような細かな選択の違いによって、無意識のうちに変化をつけ、それを楽しんでいるのだ。当たり前のように思える「選択肢が複数存在する」という事態は、私たちに日々の流れを感じさせ、新鮮な気分にさせているのである。

それでは、この時、選択肢は多ければ多いほど良いのだろうか。私は、必ずしもそうであるとは限らないと考える。文化やテクノロジーの発展により、物や情報が大量に溢れている現代の社会では、日常的な選択に於いて、その候補となる選択肢の数が格段に増えた。選択の幅が広がったこと、それはより便利で自由になったことを示すが、同時に、選択することに対して、これまで以上の労力が必要とされるようになったということでもある。選択することばかりに時間を費やし、その他の行動がおろそかになることは望ましくない。したがって、どの選択を優先するかを予め決めておくことや、素早く選択を行うことも必要だと考えられる。

これまで述べてきた日常的な選択の他にも、私たちは様々な選択を行っている。高校受験の際の受検校の決定や、秋に行われた二年時の類型登録といった学業における選択は、高校一年生である私にとって記憶に新しく、印象に残っているものである。これらの選択は、慎重な判断が必要で、すぐには結論を出せないこともあり、選択すること自体に苦痛を感じることもあった。また、様々な制約があるために、本来の希望とは少し異なる選択をしなければならず、あまり納得のいかないこともあった。しかし、こうして選択を終えた今、私は、「本当にこの選択をして良かったのだろうか。」と思うことはない。過去の選択を悔やむことなく、前向きに捉えられるのは、時間を掛けてしっかり考え抜いた結果だといえる。つまり、自らの将来を左右させるよう

な重大な選択では、その選択に真剣に向き合い、それぞれの選択肢を十分に検討することが必要なのである。この過程で、私たちは自分を高めることができるのではないだろうか。どのような場合でも、選択することから目を背けず、自分との対話を続けることで、過去の経験から自信を得たり、新たな策を生んだりできるのだ。

「取捨選択」という言葉があるように、私たちは選択する際、いずれかを選ぶと同時に、それ以外の選択肢を捨てている。これを踏まえると、選択するという行為は、自分が持っている可能性を摘み取ってしまうことになり、一見すると良くないことのように思える。しかし、それは自分の可能性を絞り、より明確にしていくために必要不可欠なことなのだ。捨てるものは潔く手放し、取るものは一貫して責任を持つという区別を行うことも大切なのだ。

私たちは、これからも数多くの選択を迫られるだろう。そして、その選択は、より複雑なものが増えるだろう。選択を迷った時には、自分にとって最も良い選択はどれかを見極めようと努めることや、考えを整理し、自分の中でしっかりと「取捨選択」を行うことがとても重要である。そうして思い悩んだ末に選んだ道こそが、私たちを理想の未来へと向かわせるのだ。

佳作

選択の意識

五条高等学校
一年　三輪　俊太

「人生は選択の連続である」とかの有名なウィリアム・シェイクスピアは言ったそうです。確かに日常生活の些細なことに始まり、その後の人生を左右する大きな決断まで、人生には多くの選択する、もしくは選択を迫られる機会があることでしょう。大きな選択といっても、自分はまだ高校受験や文系か理系かという進路選択くらいしかしたことがありませんが、これからも大学受験や就職をはじめとした、今まで以上に人生に関わる重要な選択をしなければならないでしょう。

しかし、ここで自分は思うのです。重要なことは選択することなのかと。もちろん、選択することが重要でないなどと言うつもりはありません。選択した結果、そこに何を見出すのかが重要であるという考えを否定することはできないでしょう。

それでも、選択することだけが重要なのであれば、その人の人生は長いだけのフローチャートで表せてしまうでしょう。それでいいはずがありません。少なくとも自分は、それでもいいという考えの人とは、馬が合わないでしょう。

自分の考えとしては、やはり、その選択に至るまでの過程に意味があるのだと思います。悩んだり、誰かに相談したり、時には弱音を吐きつつも、希望を持ち、少しずつでも未来へ向けて進んでいく。そんな過程や、その時考えたことを糧にして、成長していくことが人間という「心」を持った生き物の特徴だと思います。悩んだ末に納得して出した結論には、後悔したとしても、仕方がないとあきらめることもできるでしょう。しかし、せっかちなのか、単に考えることが面倒なのか、すぐさま結論を出す人もいます。そういった人の中には、直感が優れた人など、自分なりの判断基準を持った人もいることでしょう。しかし、多くの人の場合は、決断を焦り、時には状況に迫られて決断を下し、後悔しているように思います。果ては、「まあ、いっか」などと笑っている人までいます。少なくとも自分の経験上、そういった人は日常生活の中の小さな選択から、志望校を決めるといった大きな選択まで、そういった惰性に流され、時には他人に重要な選択を任せることすらありました。その光景を見たときには、大きな衝撃を受けました。自らの進路を選択するという人生の重要局面において、いくら友人とはいえ、赤の他人に自分の人生の方向を委ねる、ということをその人は選択したわけですが、そういった選択肢自体、自分は持ち合わせていなかったこともあり、その人の選択を聞いたときに、自分の耳を疑いました。その人は、自分の選択を後悔したときに、選択を委ねた他人に責任を押し付けるのでしょうか。

人間は誰しも、完璧ではありません。だから、誰でも失敗した経験が大なり小なりあると思います。寧ろ無いという人の方が異常であるとすら言えるかもしれません。やはり、後悔したときに、どういった思考をし、どういった選択をするのかということが大切なのだと思います。そして、前に進むためには、前向きの後悔が必要なのだと思います。「後悔」という言葉から受ける印象がもともと後ろ向きである以上、「前向きな」後悔は難しいかも知れません。しかし、この発想の転換こそが、自らの選択の中に意味を見出す過程において、特に大きな選択をしたときには、最も重要であると自分は考えます。

後悔することが、大きな選択においては付き物であるとさえ言えるのであれば、上手に後悔する必要があるでしょう。後悔することで、後ろ向きな気分になり、精神状態が悪化しては前進す

ることは困難です。よって、「前向きに後悔、反省する」ことが必要とされるわけです。例えば、「今回のテストで、いい点数が取れなかった」という後悔をした人がいたとします。この後、後ろ向きな思考をすれば、「もうだめだ。もういやだ。勉強なんかしたくない。」といった負の連鎖に陥り、立ち直ることすら難しくなるかもしれません。しかし、前向きな思考をすれば、「ここが駄目だった。じゃあここを頑張れば次はいい点が取れるかもしれない。」といったように、次の機会につなげ、前進することこそが悩むことの意義だと考えます。

では、選択の意義とは何なのでしょう。自分は以前、選択する過程に意味があると書きました。選択する過程が悩むことであるならば、悩むことに意味があることになります。自分は確かにそう考えているのですが、何度も強調してきたように、大切なのは悩み方であるのです。これまで自分は、心の在り方が全てに影響する話を、何人かの大人から聞きました。そして、最近になって、ようやくそのことを実感し始めました。心が後ろ向きになっているときには、体調が整わず、パフォーマンスも低下します。前向きであれば逆のことが起きます。「病は気から」とはよく言ったものです。

悩み方次第で心の在り方が決まるとは言えないかもしれません。心とはそれ程簡単なものではないでしょう。しかし、うまく悩めばそれが糧になり、より良い心が形作られていくことでしょう。悩み方の選択次第で、日常生活の明暗が分かれ、また、人生の明暗が別れることもあるかもしれません。

第９回　三稜会懸賞論文
稲葉真弓賞

テーマ「**日本**」にて募集します。

募集期間　2018年11月１日～2019年１月31日
応募資格　西尾張地区の公私立高校生

詳しくは、10月に配布予定の募集ポスターに掲載

審査委員会講評

審査委員長　大野　広樹

第八回三稜会懸賞論文「稲葉真弓賞」に十二校から五四三点の応募がありました。全体としては前向きで素直に自分の考えが述べられている作品が多く、生徒のみなさんが真剣にこのテーマに取り組んでいる姿が思い浮かびました。「選択」というテーマは、今までの自分自身の体験で書くことができるテーマでもあり、約十六～十七年間の人生の中での「選択」という経験になると、高校受験、部活動、文系理系など、どうしても同じような経験を材料に書かれたものが多いという印象もありました。しかし、その中で独自の切り口で他とは違う斬新な書き方で論じているものもいくつかありました。

最優秀賞の作品は、他の人にはない「言葉の選択」というテーマに絞り込み、日常的に何気なく使っている若者達の言葉の使い方に独自の論を展開し、わかりやすい文章でありながら、読んでいる人に新たな気づきを与えてくれる、そんな文章でした。特に若い人たちが使っている「やばい」という言葉についての冷静な心理分析については、目を見張るものがありました。また、普段我々大人が子どもたちに「語彙力を身に付けた方がよい」と言っている割には、「なぜ?」と問われて上手く説明できないところを、下ノ薗さんは、「社会に出たときに後悔しないために私たちは今学ぶのである」と力強い言葉で言い切っています。このような堂々とした表現の中に説得力を感じました。ほとんどの審査員が最優秀賞として推すことに異論のない作品でした。

優秀賞の作品は、「選択することによって人生をより豊かで深みのあるものにすることができる」という表現や「選択に真剣に向き合うという過程において自分を高めることができる」という表現など、「選択」の意義について論じているという点において独自の論をわかりやすくまとめてある文章でした。また、「取捨選択」という言葉から「選択は選ぶと同時に捨てる行為であること」に着目し、「捨てることの潔さの必要性と取り上げることに責任を持つことの大切さ」を論じている点に、他にはないオリジナリティーを感じさせてくれました。

紙面の都合上、佳作のみなさんの講評ができないのが残念ですが、どの作品も甲乙付け難い、それぞれの個性が十分発揮された力作でした。

最後に、この懸賞論文を御支援していただいております協賛会社の皆様方を始め、参加していただいた学校や生徒のみなさん、御指導いただいた各学校の先生方、本当に御協力ありがとうございます。来年度の第九回、再来年度の第十回の節目に向かい、さらに充実した「稲葉真弓賞」にして参りたいと思いますので、今後ともよろしくお願い致します。

他の４作品と第１回からの最優秀賞と優秀賞作品は、三稜会ホームページに掲載してあります。ご覧ください。

三稜会ホームページ　http://www.sanryokai.com

忘れても　なお余りある　君故に
うつむく心を　川にすてたし

うららうらの　春の照日に　身をまかせ
花つむふりして　君をまつ

変わる色　雨のたびごと　あじさいの
人の心と　思えたり

一人見る　山の星は　故郷の
君の別れを　しらじら告げむ

至宝　平野真弓さんの大学ノート公開（第２回　高校２年生編）
～真弓　17歳　うかがわれる詩人への強い決意～

昨年の第１回　～乙女心の変化を追って～　に続く第２回として、２年生時の稲葉（旧姓　平野）真弓さんの大学ノート作品の紹介です。このノートには、詩92、短歌24散文１、川柳等12、連詩１が収められていて、中には真弓さんの決意が書き留められている作品もありました。

高校二年生時の大学ノートに書かれた二十四首の歌のうちの抜粋作品です。七夕にちなんで短冊にして飾ってみました。

詩は、「(まるで) …のよう」というわかりやすい別のものに喩(たと)える表現が多用され、１年生時よりも増えていました（１年生時　19／85作品　22.4%、２年生時　25／92　27.2%）。ノーベル文学賞候補に毎年挙げられている小説家・村上春樹氏もこの表現方法を好んで使っていますが、それは実に丁寧に読み手に伝える表現手法であり、真弓さんの人柄とも言えるのでしょう。

冒頭の散文詩『おじさまの話』の最後２行に、「お父さまをなくした私は／男のかたが今とても恋しいのです」と吐露され、この感情が本ノートを貫いています。高校２年も終わりに近い１月に書かれたと思われる『弟に』、そして「３／５」の日付がある『詩人』『旅立ち』には、詩人になる強い決意がうかがわれ、詩人平野（稲葉）真弓の誕生を迎えます。

短歌は、1年生時のノートには1首しかなかったが24首詠まれており、また川柳等が12句記されています。一方『五月の組曲』と題された詩は、「一　五月を歩く少年」から「四　少年に」と続く連詩となっていて、この手法はさらにこのあとのノート作品にも散見してきます。連詩から小説へと、あたかも文学表現手段を探っているかのように……。

【詩等】

おじさまの話

ずっーと胸を悪くして寝ていらっしゃるおじさま
まだマミが小さくって名前もおぼえられない頃
一度会ったきりのおじさま
貧しい詩人だったとか
古びた詩集の中にあった写真の
おじさまはほっそりとして
何だかとてもやさしそうな方でした
もう今は白いおひげで
小さなわたくししか覚えていらっしゃらないかも
しれません
わたくしがもう愛を知って
恋の詩も書けるようになったと言ったら
きっとびっくりなさるでしょう

春の暖い日
わたくしはおじさまの恋の詩の中にあった
スミレの花をもって
お見舞いにゆきませうか
お父さまをなくした私は
男のかたが今とても恋しいのです

五月の組曲

5.28.

一. 五月を歩く少年

あごをしめ
くちびるをかんで
五月を歩く
少年よ
いつか たくましく
脚はのび 目はすわやかで
鼻筋がうつくしい

知らぬ間に
いつの間にか おとなになり
私はあなたを見上げて歩く

風に吹かせた髪を
かきあげもせず
五月を歩く少年よ

私は
あなたの影をひろって
木もれ日の中をかけてゆくのだ

二　五月のある日

それは　五月のある日。
日だまりの中で
少女は少年のきらめきとした瞳をみつけた。
髪をなびかせ
ほほをそめ
その日　少女は
愛から逃げることを知った。

それは　五月のある日
ひばりのさえずりに
少年は少女の声をきいたように思った。
いくらか含んだ　やさしい声に。
そして少年は
少女に向ってほほえんだ

それは五月のある日
少年はおとなになった

それは五月のある日
少女はおとなになった

それは五月のある日
五月のきれいなある日のこと。

三　散文

緑の草の香り
ほほうめて　ああ五月
茎かんで　目をとじる
唇そめて　とぶ五月
風はゆき　愛のまたたき
ゆるがぬは　ただ五月
空をゆく　ひばりの旅
とだえして　もう五月
手をかざす　木もれ日の
こもりうた　ゆく五月
ゆく五月

四. 少年に

影の中を影となって
髪をなびかせ
歩いてゆく
ただ ひとり……

少年よ少年よ
いつの間にか おとなになり
手の届かぬ ところへ
ゆくおそれ

木もれ日の中で
汗をふいて見上げるその目に
認めては くれぬか この私を

影の中を小鳥になって
口笛ふいて
かけてゆく
ただ ひとり……

少年よ 少年よ
脚ばかりが長くて
指をならすのが
うまい おそれ

茂った木々の上から
少女をさがして ふく口笛に

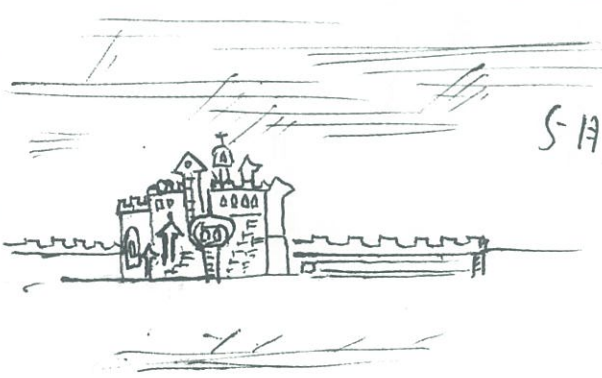
認めては くれぬか この私を

影の中を見になって
脚をくんで（目をとじて）
泳いでゆく
ただ ひとり……

少年よ少年よ
さわやかな ひとみの中に
きびしいまでの 冷淡さを
ひめる おそれ

やわらかな日ざしに
さしのべた たくましいうでに
認めては くれぬか この私を

5/28



5月のエチュードより

以上、直筆五作品は高校二年生時代の詩集（大学ノート）より転載

弟に

弟よ
おまえが母に抱かれて
白いミルクを飲んだ時
私はそこに小麦色の少年の姿をみた
そして口笛がふけるようになった時の
おまえの得意そうな顔を
私は額にはめてやった
それは今もませた口をとがらせて
澄んだ音をきかせてくれる

弟よ
おまえの泳ぐ姿はすばやくて
私はおまえの周りの水しかみることができない
松の日ざしに焼けた背中が
まるで大人のような印象で
私をおののかせたことだ

弟よ
きっちりときりそろえた前髪が
ふれれば幼子のはだのようにやわらかいことを
私はよく知っている
おまえが冬の風の中を自転車で
かける姿を
私がどんな気持ちで見ているか
おまえははたして知っているだろうか

弟よ
父と遊んだ日々のことを
おまえはまだ覚えているだろうか
春の日父を亡くしたおまえの瞳から
涼しい涙があふれた時
私はおまえが強い青年になってくれることを願っていた
おまえの涙はまだ幼いままに私の胸の中に
宿っている

弟よ
やがておまえは大きくなって
私はおまえを見上げて歩くだろう
しかし忘れてはならない
幼い日々を　そして父を……
弟よ、私はいつもお前を愛している

詩人

――美しくはね上げられた
長いソナタの最後――

その余韻に目をとじ
日ざしがさしこんだ窓辺に
奇蹟のように
乙女が立ってはいないかと
おそるおそる目を開ける

ゆれ動くつたのからまりが
石に映えた光の陰につらなって
流れた音符の響きを
まだ漂わせている

とじたひとみの中に
めじかのような
ものうさが
鈴のようにリンリンと
なりつづけていた

――詩はそこから始まり
詩人はそこで詩人となりうる――

旅立ち

――とじたまぶたの
おののくようなまつげ――

眠りについたおとうとの
ふうわりと赤いくちびるに
やわらかなくちづけの跡を残して
姉は明日旅立ってゆく

長かった子供の時を去り
やがておまえもゆくであろう

ゆれる水に歓喜し
裸で一緒に水浴びをしたことも
紫に暮れゆく野の道で
れんげの冠をつくったことも
みんな遠くなってしまうだろう

夢の世界をさまようおとうとの
白いほほにくちづけて
姉は明日十七才へと旅立ってゆく

カラーの挿絵は既成の「イラストカット集」より転載。
作家の作品ではありません。